

「^お上山^ろ城」からのたより 冬・第162号



【常設展示室から】抽選で景品が当たるクイズ上山城探検を毎月実施中。クイズを解きつつ、ご見字をお楽しみください。

美味しい果物の原点

(公財) 上山城郷土資料館理事長 森久保俊満

上山に天保年間より伝わる美味し

い牛蒡の種の話聞いたことがある。

よい土と気候に恵まれ生産に工夫を重ねる江戸時代の田園風景が、今日の上山と重なり合い目に浮かぶようだ。

農産品は、その土地の風土が生み出しそこにしかない特徴をもっていると感じるが、かつての生糸の生産をめぐる、このことがわかる歴史的なでき事

があった。

開国を期に、蚕の病気が蔓延するフランスとイタリアの需要に答えて蚕種の増産が始まった。やがてバスターの研究がこの病気を克服し、日本の輸出品はアメリカに向けた生糸が中心となる。織機の改良を重ねていたアメリカからは、繊細で柔らかな糸より強度のある経糸が望まれた。これを受けて、品質改善に国を挙げた取り組みが開始される。糸質を揃えるために

「蚕種統一」をめざした「蚕糸業法」が成立するが、生産者の大反対にあつた。気候風土を無視し育てる品種を制限したからである。起死回生策は、遺伝学者の外山亀太郎博士が提唱する「一代雑種」であった。外山は土地にあった作物を育ててこそ、と主張し遺伝法

則に基づく掛け合わせの利点を説いた。そして、法改正と企業の方針転換

がイノベーションをもたらし、日本の生糸輸出は世界一に躍り出ることになった。各地の創意工夫が生かされる道が開いた賜物である。

上山のフルーツは、沢山の特産品が流入する関東圏においてひと際華やかである。その土地柄と生産者の思いがぎゅつと詰まっているからだ。フルーツの味にとどまらず、地域の歴史と文化には驚嘆することが多い。これは、地元力を結集する働き、それを引き出す働きの相互作用だろう。立藩400周年築城40周年記念事業が地元力を発信する良い機会となっていれば幸いである。本年もどうぞ宜しくお願